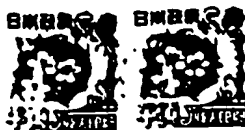


FILED 9/2/00

Abstract (Basic): JP 49132247 A

Short fibres were added to pack prepns. prepd. from film-forming higher mol. wt. cpds. and basic cosmetic materials to improve the pack properties such as drying time and film strength. In an example, a pack prepn. contained poly(vinyl alc.) 10, ethoxylanolin 2, sorbitol 5, glycerol 5, disinfectant 0.5, perf20 80, and acetate fibre D 20 parts.



特 許 局

昭和48年4月24日

特許庁長官 三宅 幸 夫 殿

1 発明の名称

マイソヤブ
ベツナ樹脂成物

2 発明者

カナガワケンオ 67911ナミヤ
住所 神奈川県小田原市南町3丁目1番38号
氏名 アノ イサオ (ほか 1名)

3 特許出人

住所 東京都墨田区堀江5丁目3番26号
名称 (095) 通商株式会社
代表者 伊 藤 淳 二

4 代理人

郵便番号 534
事務所 大阪市都島区文庫町1丁目3番33号
通商株式会社本部内
氏名 (4180) 齊藤士 水 口 孝 一

① 日本国特許庁

公開特許公報

① 特開昭 49-132247

③ 公開日 昭49.(1974)12.18

② 特願昭 48-47124

② 出願日 昭48.(1973)4.24

審査請求 未請求 (全7頁)

片内整理番号

⑤ 日本分類

6617 42

31 B0

1 発明の名称

ベツナ樹脂成物

2 特許請求の範囲

皮膚形成能を有する高分子化合物と公知の香料成分を基質とするベツナ剤において、化粧能を含有することを特徴とするベツナ樹脂成物。

1 発明の課題を説明

本発明は改良されたベツナ樹脂成物に関するものである。

更に詳しくは特定の化粧能の添加によって改良されたベツナ樹脂成物に関するものである。

従来、ポリビニールアルコール等の水溶性高分子を含有するエマルジョン型又はゼリー状型の皮膚形成能を有するベツナ剤がよく知られているがこれらのものは一般に乾燥速度が比較的遅くかつ皮膚強度も充分でないために乾燥の速度が遅れたり皮膚上に皮膚の一部が残留するまど又その化粧料本来の機能を損う欠点があった。

即ちポリビニールアルコール等の高分子化合物を基質とするベツナ剤においては、乾燥速度

をよくするために又は強度を強くするためにポリビニールアルコールの濃度を高くすることが考えられるが濃度を高くすれば必然的にベツナ剤の粘度が上昇して顔に塗布する際のびが悪く又乾燥して剥離する際は皮膚に密着し過ぎて肌と皮毛を引張り痛みを感じたり、又ベツナ剤中の原料長が短くなったたりする欠点がある。化粧料本来の具備する条件から観測いものとなる。

一方化粧料本来の具備すべき条件を満たすために粘度を低くし使用感の良好なベツナ剤を作るにはポリビニールアルコールの濃度を低くせねばならぬが、ポリビニールアルコールの濃度を低くすれば皮膜が弱くなり剥離が問題となり皮膜が皮膚に残留する等の欠点が生じてくる。

本発明者等は上述の欠点を改良せんとして鋭意研究した結果乾燥能を皮膚形成能を有する高分子化合物のベツナ剤に共存含有せしめることにより乾燥速度が速く早く剥離を容易かつ円滑に行い得ることを見出し本発明を完成した。

本発明の第1の目的は、速く乾燥速度が早く生成皮膜の剥離を容易かつ円滑に行い得る改良されたベツナ剤を提供することにある。

他の目的並びに用途は以下の説明から明らかとされよう。

本発明は皮膚形成能を有する高分子化合物を基材とするベツク剤において、繊維膜を有することを要とするベツク剤組成物である。

本発明に使用する皮膚形成能を有する高分子化合物とは、水に容易に溶解又は分散し且つ乾燥時に皮膚を形成する天然高分子又はその誘導体又は合成高分子化合物である。

天然高分子又はその誘導体としては、例えばゼラチン、アルブミン、グルタン、ペクチン等の蛋白質、アルギン酸等の多糖類、ノタルセルローズ、カルボキシノタルセルローズ等のセルローズ系、トラガントガム、アラビアガム等のガム質又は天然ガムラファクトスを挙げることができる。

合成高分子化合物としては、例えばポリアクリル酸エステル、ポリアクリル酸（又はその塩）、ポリビニルアルコール、ポリ酢酸ビニル等のビニール系単量体重合体、酢酸ビニル、アクリル酸エステル、アクリル酸、メタクリル酸、アクリロニトリル等のビニール単量体を二重以

上重合した共重合体、合成ゴムのラファクトスを挙げることができる。

これら高分子化合物のベツク剤中の濃度は、一般に2～60%（重量）の範囲内である。高分子化合物の種類によって、最適濃度が相違する。例えば、ポリビニルアルコール等の水溶性高分子の場合は、約20%以上の濃度では粘度が高過ぎて肌へののびが悪く（粘度が高過ぎると原料臭も強くなり又皮膚膜の乾燥の際膜へ密着し過ぎて肌が痛く又重毛を引張って痛い。また2%以下の濃度では皮膚の形成が困難且つ乾燥に長時間を要する）として皮膚が弱いので創傷が円滑に行われず、また肌に生成皮膚が誘発することがある。

エマルジョン型の合成樹脂やラファクト系は、一般に水に分散し低粘度を示すので約60%の高濃度でも用いることができる。

本発明に使用する繊維としては、木綿、羊毛、絹、麻等の天然繊維、レーヨン、アセタート等の化学繊維、ポリエステル系、ポリアミド系、アクリル系、ポリオレフィン系、ポリ塩化ビニル系、ポリビニルアルコール系等の合成繊維

を挙げることができる。これらの中で羊毛、絹、アセタート、ポリアミド系、ポリエステル、ポリビニルアルコール系等が更に良合に優れているので最も好ましいものである。

本明細書で言う繊維とは、通常の単繊維、複合繊維、及び糸を意味する。

繊維の長さは、短かすぎると本発明の利便の一つである繊維を膜形成効果がなくなる。又長すぎると繊維膜はもつれて、厚（まこ）となり分散し難くなり、ベツク剤製造時に、攪拌機にまつわり又充填機にもかからず実用的でない。かゝる理由からして繊維の長さは50～500mm好ましくは100～150mmである。

繊維の太さについては最適値ともつれて因子状（だま）になり、製造時に均等に分散し難くなり、また均等にベツク剤中に分散しても膜に分布する膜にまだらになり、均れて均一のび難くなる。

又太くより通ずると製造時に攪拌機に詰まり、製品を膜に塗す際アラツキが出て粘度が低下し易い。

かゝる理由からして、繊維の太さは1デニール

乃至50デニール好ましくは5～20デニールである。

又繊維はグル又はセキグルでも良く処理されていてもされなくても良い。

繊維膜の添加配合量はベツク剤基材によつて相違するけれども通常ベツク剤中に1～50%（重量）好ましくは5～40%（重量）である。1%より少ないと乾燥速度が遅くなり、耐水性が低下するので好ましくない。また50%（重量）よりも多くなると触感がわるくなる傾向がある。

繊維膜は、前記高分子化合物の溶液、分散液に直接混合してもよいし、また油脂、乳化剤、界面活性剤、乳化安定剤、増粘剤、保護剤、アルカリ剤等の香粧品基材の溶液、分散液や糊状剤、糊液等に混合してベツク剤を調整してもよい。添加混合する段階に限定されないけれども配合する前記高分子化合物、前記香粧品基材の種類、性質、添加量や膜厚の種類、性質等を調整して、繊維が安定にかつ均一に分散、分布するよう適応混合時間を選択することが好ましいである。

以上要するに本発明は、皮膚形成能を有する高分子化合物と全知の薬品原料を基とするベツタ剤において、乾燥能を含有せしめることにより、その乾燥速度を早くし、生成皮膚の創傷を容易かつ円滑に進行し得るベツタ剤であつて、その商品価値は極めて高いものである。

以下実施例によつて本発明を更に詳細に説明する。実施例に記載のものは重量百分率を意味し部とは重量部を意味する。

実施例1

I. 組 方

①	ポリビニールアルコール	10 部
②	エトキシ化ラノリン	2
③	ソルビトール	5
④	グリセリン	5
⑤	殺菌剤	0.5
⑥	香料	1.0
⑦	水	80
⑧	アセート酸(4D, 40カフト)	20

II. 製造法：28℃にて水⑦中にアセート酸⑧を分散させる。この中にポリビニールアルコール①とソルビトール③及びグリセリン

④とを添加したものを攪拌しながら添加する。このものを加熱して80℃に達した時、これにエトキシ化ラノリン②、殺菌剤⑤及び香料⑥の添加物を添加して充分攪拌し、次いで真空脱泡し均質して製品とする。

られた製品はのびがよく、使用感良好で、乾燥速度が早い。又創傷の深さが浅く、痛みが激れずに一枚の布で取れ、風や塵等の害もなく創傷回復物も落ちない。

比較として乾燥能を添加しない他は前記と同様にしてベツタ剤を製造し、次いで同様にその性能をしらべた。これらの結果を第1表に記載した。

実施例2

乾燥能を第2表の如く変化したアセート酸を使用する他は実施例1と同様にして夫々のベツタ剤を製造し、その性能をしらべた。その結果を第2表に示した。

以下余白

表 1

試験項目	本 発 明 (乾燥入り)	比 較 例 (乾燥なし)	備 考
	乾燥時間	乾燥時間	乾燥時間
乾燥時間	15分	25分	0.5mmの厚さの皮膚が乾く要する時間
皮膚強度	300gr	200gr	厚さ0.5mmの皮膚の破断強度
使用感	90%	88%	使用テストにて使用感良好と答えた者の百分率。(但し被試験者数30名)
創傷状態	98%	50%	使用テストにて良好な状態にて創傷すると答えた者の百分率。(但し被試験者数30名)

表 2

試験法	試験時の分散状態 (mm)	試験時の分散状態 (mm)	乾燥時間 (分)	皮膜強度 (gf)	使用感	耐水性
0	0.5	0.5	20	200	良好	良好
0.5	0.5	0.5	15	220	良好	良好
0.5	0.5	0.5	15	230	良好	良好
1.0	0.5	0.5	15	250	良好	良好
2.0	0.5	0.5	15	280	良好	良好
5.0	0.5	0.5	15	300	良好	良好
10.0	0.5	0.5	15	320	良好	良好
15.0	0.5	0.5	15	350	良好	良好
20.0	0.5	0.5	15	380	良好	良好
50.0	0.5	0.5	15	400	良好	良好
100.0	0.5	0.5	15	400	良好	良好

アミンを溶かし次にナイロン単液を分散させる。更にプロピレングリコールとポリビニールアルコールを混合したものを均一に分散溶解させる。

最後にA部とB部とを混合すると透明ゼリー状（粘度約8万センチポイズ）で単液分散のベタ剤を得る。

かくして得られたベタ剤は、実施例1の場合と同様に、試験を含有しないものに比較して耐水性、皮膜強度、使用感、耐水性が優れている。

実施例4

I. 処方

①	ポリビニールアルコール	5
②	ステアリン酸	5
③	セチノール	0.5
④	グリセリン	7
⑤	防腐剤	0.5
⑥	トリエタノールアミン	1
⑦	香	1
⑧	水	80

実施例5

I. 処方

①	ポリビニールアルコール	5部
②	遊離炭素カルボキシビニールポリマー	2
③	ポリオキシエタレンソルビタンラウレート	2
④	水溶性ラノリン	2
⑤	プロピレングリコール	4
⑥	ダイソプロペノールアミン	1
⑦	防腐剤	0.5
⑧	香	1
⑨	エタノール	5
⑩	水	80
⑪	ナイロン(セリゲル号15D, 8mmカフト膜)	5

II. 製造法

A部：水の半量にポリオキシエタレンソルビタンラウレート及び水溶性ラノリンを溶解する。次にエタノールに防腐剤及び香料を溶したものを混入する。次に遊離炭素カルボキシビニールポリマーを均一に分散させる。

B部：一方残りの水にダイソプロペノール

① ポリエステル(ゲル膜)膜 30

①	6D	3mm	カフト	50%
②	11D	8mm	カフト	30
③	3D	1mm	カフト	20

I. 製造法

水にトリエタノールアミンを溶かし、次に単液を分散させる。次にポリビニールアルコールとグリセリンを混合したものを添加し、70℃に加熱する。一方ステアリン酸、セチノール、防腐剤を70℃に加熱し、先の水相部に投入乳化し香料を加えて室温迄冷却すれば、膜入りりのクリーム状ベタ剤を得る。得られたベタ剤は、試験を含有しないベタ剤に比較して、耐水性、皮膜強度、使用感、耐水性が優れている。

実施例6

I. 処方

①	ノブアクリル酸乳化重合体(固形分40%)	40部
②	ステアリン酸	2
③	セチノール	0.5
④	ポリオキシエタレンラウリルアルコールエーテル	0.5
⑤	ソルビタンモノステアレート	1

① トリエタノールアミン	0.5
② 防腐剤	0.5
③	1
④ 水	40
⑤ 細品(40番手(より系)10mmカフト)10	

I. 製造法

水にトリエタノールアミンを溶かし、次に微細を分散させ70℃に加熱し水相とする。一方ステアリン酸、細ロウ、ポリオキシエタレンラウリルアルコールエーテル、ソルビタンモノステアレート、防腐剤を70℃にて溶解し、此れを先の水相に溶解し乍ら添加乳化し試着して30℃迄冷却する。これにメタクリル酸乳化重合物を添加混合すれば、微細入り乳状ベツタを得る。得られたベツタ剤は、微細を含有しないベツタ剤に比較して、乾燥性、皮膚強度、使用感、刺激性が優れている。

実施例6

I. 処方

① ポリビニールアルコール	5部
② 遊離重合カルボキシビニールポリマー	2

軟(粘度約8万センチポアズ)で半微細を含有しないベツタ剤に比較して、乾燥性、皮膚強度、使用感、刺激性が優れている。

実施例7

I. 処方

① ポリビニールアルコール	5部
② ステアリン酸	5
③ セタノール	0.5
④ グリセリン	7
⑤ 防腐剤	0.5
⑥ トリエタノールアミン	1
⑦ 香料	1
⑧ 水	80
⑨ ポリエステル(ダム)樹脂微細	50

4D, 5mmカフト	50%
11D, 8mm "	50
3D, 1mm "	20

I. 製造法

水にトリエタノールアミンを溶かし、次に微細を分散させる。次にポリビニールアルコールとグリセリンを混ぜたもの、添加し70℃迄加熱する。一方ステアリン酸、セタノール、

① ポリオキシエタレンソルビタンラウレート	2
② 水溶性ラノリン	2
③ プロピレンジリコール	4
④ ダイソプロペノールアミン	1
⑤ 防腐剤	0.5
⑥ 香料	1
⑦ エタールアルコール	5
⑧ 水	80
⑨ ナイロン(セミダム, 15D, 8mmカフト)樹脂微細	5

I. 製造法

A部: 水の半量に、ポリオキシエタレンソルビタンラウレート及び水溶性ラノリンを溶解する。次に、エタールアルコールに防腐剤及び香料を溶したものを混入する。次に遊離重合カルボキシビニールポリマーを均一に分散させる。
B部: 一方残りの水にダイソプロペノールアミンを溶かし、次にナイロン半微細を分散させる。更にプロピレンジリコールとポリビニールアルコールを混合したものを、均一に分散溶解させる。

最後にA部とB部とを混合すると、透明ゼリ

ム、防腐剤を70℃に加熱し、先の水相部に投入乳化し、香料を加えて常温迄冷却すれば、微細入りのクリーム状ベツタ剤を得る。得られたベツタ剤は、微細を含有しないベツタ剤に比較して、乾燥性、皮膚強度、使用感、刺激性が優れている。

実施例8

I. 処方

① メタクリル酸乳化重合物(固形分40%)	40
② ステアリン酸	2
③ 細ロウ	0.5
④ ポリオキシエタレンラウリルアルコールエーテル	0.5
⑤ ソルビタンモノステアレート	1
⑥ トリエタノールアミン	0.5
⑦ 防腐剤	0.5
⑧ 香料	1
⑨ 水	40
⑩ 細40番手(細品)10mmカフト	10

I. 製造法

水にトリエタノールアミンを溶かし、次に微細を分散させ70℃に加熱し水相とする。一方、ステアリン酸、細ロウ、ポリオキシエ

チレンタリルアルコールエーテル、ソルビタンモノステアレート、防腐剤を70℃にて溶解し、此れを先の本剤に混拌し乍ら顔加乳化し、試して30℃迄冷却する。これにメタアクリル酸乳化石合物を顔加混合すれば顔入り乳状ペフタ剤を 得る。

得られたペフタ剤は、酸度を含有しないペフタ剤に比較して、乾燥性皮膜強度、使用感、耐水性が優れている。

出 願 人 鐵 紡 織 式 会 社

代理人 弁護士 水 口 孝 一

5 添付書類の目録

- | | |
|-------------|-----|
| (1) 明 細 書 | 1 通 |
| (2) 願 書 冊 本 | 1 通 |
| (3) 任 状 | 1 通 |

6 前記以外の発明

カナガワケンオ 伊ワタリコトブキヤヨロ
住所 神奈川県小田原市海町5丁目4番3号
氏名 オオ 孝 一 郎

手 続 補 正 書 (自 発)

昭和48年8月20日

特許庁長官 斉 藤 英 雄 殿

1 事件の表示

昭和48年特許願第47124号

2 発明の名称

ペフタ剤組成物

3 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 東京都墨田区横通3丁目3番26号

名称 (095) 鐵 紡 織 式 会 社

代表者 伊 藤 淳 二

4 代 理 人

居 所 大阪市都島区友愛町1丁目3番80号

鐵 紡 織 式 会 社 本 部 内

氏名 (6180) 弁護士 水 口 孝 一

5 補正により増加する発明の数 なし

6 補正の対象

明細書の「発明の詳細な説明」の項

7 補正の内容

本補明細書を次の通り訂正します。

(1) 明細書、第6頁第13行～第14行に記載の「界(面活性剤)」を「界面活性剤」に訂正します。

(2) 明細書、第12頁第13行に記載の「酸」を「酸度」に訂正します。

(3) 明細書、第13頁下から8行目に記載の「5」を「5部」に訂正します。

(4) 明細書、第3頁下から2行目に記載の「メタクリル酸」を「メタアクリル酸」に訂正します。

(5) 明細書、第15頁下から4行目～第19頁第9行に記載の「実施例6一中略一耐水性が優れている。」を削除します。

(6) 明細書、第15頁下から5行目に記載の「耐水性が優れている。」の後に、

「実施例6

実施例1のアセチート繊維(40、4=カフト)の添加量を第3表に示す如く変化する他は実施例1と同様に行つた。その結果を第3表に示した。

第 3 表

配合量	実 験 手 法			製造時の分散及成形性への影響(作業性)
	試 験	乾燥速度(%)	制 造 性	
0	普通	15	不良	-
0.5	"	15	"	分散性良好、製造容易
1	"	25	やや良好	"
3	良好	30	やや良好	"
10	"	30	良好	"
30	"	15	"	"
50	"	15	"	"
40	"	15	"	分散性良好、製造容易
50	普通	10	やや良好	分散性悪く良好、製造容易
60	悪い	10	不良	分散性不良、製造困難

以上の結果から明らかなように、乾燥機の添加配合量は、パフタ基材によつて若干相違するけれども通常パフタ基材中に1~50%(重量)好ましくは5~40%(重量)、最も好ましくは10~30%(重量)である。

1%よりも少ないと乾燥速度が遅くなり、制油性が低下するの好ましくない。50%よりも多くなる場合、制油性、製造時の分散性、作業性が低下するので好ましくない。」を挿入します。